利用者本位の介護
～ニーズ把握の大切さ～

16CC09　鈴木花奈子

Ⅰ．はじめに

私は、実習Ⅲを介護老人福祉施設で行い、そこで右片麻痺であるA様と出会った。A様は、右片麻痺があることにより１人での排泄は困難であるが、羞恥心が強い為「トイレでの排泄を自力で行えるようにしたい」という希望があった。そこで介護過程展開では利用者のニーズを満たすことが出来るよう、下肢筋力の維持に着目して計画を立て、レクリエーションの実施をした。その中で継続することの大切さを学ぶことが出来たため以下に報告する。

Ⅱ．実習先種別・実習期間

介護老人福祉施設

2017 年 6 月 26 日～7 月 28 日（うち 23 日間）

Ⅲ．事例紹介

A 様　70 歳代　女性

1.家族構成及び生活暦

5 人兄弟の 2 番目としてA県に生まれた。学生時代はバレーボール部に入所しており、「努力家で真面目なところは学生時代に培われたものだ」と言った。結婚後は、旦那様の仕事の都合により、B都へ引っ越し、2 人の子供を出産。旦那様の仕事が忙しく、単身赴任で家を空けることが多く、1 人で子育てと家事を両立していた。

2.入所に到った理由

23 年前に脳梗塞を発症し、在宅で生活をしていたのだが、旦那様の介護負担などからＣケアセンター（介護老人保健施設）へ入所。しかし、経済的な理由から、C施設（特別養護老人ホーム）へ入所に至った。

3.健康状態

主な疾患は脳梗塞を発症したことが原因とされる右片麻痺と失語症である。

4.日常生活の状況

(ア)移動

車椅子を使用。右足はフットレストに乗せ、左手足を使って自走。

(イ)食事

糖尿病を患っているため、前の施設では減塩食であったが不満があったため現在は常食。左手でスプーンを使い、自力摂取。

(ウ)排泄

自走しトイレまで移動。後に職員にズボンの上げ下げを介助してもらう。立位保持は可能。車椅子からの立ち上がりは可能だが、便座からの立ち上がりは介助。夜間はオムツ着用。

(エ)コミュニケーション

失語症によりうまく言葉が出てこず、もどかしさがある。

4.性格

とても穏やかでよく笑う方である。一方でこだわりが強く、きっちりとしている面があった。また、使用しなくなったお尻拭きシートをこっそり私に手渡して「内緒で処分して」と言ったことや、オムツに関する話をすると顔を歪めて「オムツは恥ずかしい」等の発言から羞恥心が強い方だと分かった。

6.1 日の過ごし方

他の利用者の話を席で聞いていたり、ＴＶをぼんやり眺めていたりすることが多い。暇になると席を離れ、施設内を散歩する。

Ⅳ．介護の実際

1.課題の発見と分析

普段、車椅子を使用しているA様は下肢筋力を使う機会が少ない為、排泄時の立ち上がりが困難である。また、右片麻痺があるということもあり、車椅子から立ち上がる時は手すりを掴んで自力で立ち上がれることが可能だが、便座から自力で立ち上がる際には介助が必要であることも分かった。座面が高い車椅子からの立ち上がりは可能だが、座面が少々低い便座の立ち上がりが困難な理由として、下肢筋力低下が原因のひとつであると分析した。

2.介護上の課題

A様のニーズはトイレでの自力排泄であるため、自力で立ち上がり、ズボンの着脱も自力で行う必要がある。しかし、A様は下肢筋力を使う機会が多くないため、このままでは筋力が低下し立ち上がりが困難になってしまう可能性がある。

3.介護目標

長期目標：「トイレでの排泄を継続したい」

短期目標：①「車椅子から便座への自力移乗を継続できる」

②「便座から車椅子の立ち上がりがスムーズに出来るようになる」

Ⅴ．実施及び結果

下肢筋力を使う機械が少ないために、レクリエーションを通して動かしていただき、楽しみながらも筋力維持をしていただけるように計画を立てた。実施内容としては、足の甲にお手玉を乗せ、得点にめがけてお手玉を飛ばしてもらうゲームを行った。このレクリエーションを練習含み1人4回行い、7月15日と19日の2回実施したため、計8回行っていただいた。実施をするにあたって、まず、A様がレクリエーションに参加しやすいよう環境をつくった。

7月15日の実施後の様子から自分の思ったようにお手玉を飛ばすことが出来ず、悔しがっている様子から負けず嫌いであることが分かった。また、席に戻ってからも可動域を制限なく動かしている姿から継続していくことで筋力維持を図れると考えた。しかし、2回目の7月19日の実施後のA様の反応は薄く、3回目以降は飽きてしまうことが考えられる。

Ⅵ．考察

立ち上がり動作を確認する為に、様々な環境で立ち上がり動作をしていただいた。その際に、前腕部で体を支えることで立ち上がりが出来ると分かった。このことから、前腕部をつくことができる台や、テーブルのような用具または環境を作ることが重要であると考えられる。

下肢筋力維持のために実施したレクリエーションでは、利用者の反応から回数を重ねることで飽きてしまうことが想定された。そのことから、利用者が飽きないようにルール改善や、レクリエーションのバリエーションを増やすなどの工夫をする必要があると考えた。

トイレでの排泄を継続するため、機能訓練士に相談し、レクリエーションを2回実施したが、2回では立ち上がり動作時に変化が見られないため、継続して行うことが必要であると感じた。生田(2008)は自身の体験より「3年以上かけて行っている歩行改善と練習の成果で、痛みもとれ、ほとんど正常になりました。[1)]」と述べていることから継続の大切さを学ぶことができた。

立ち上がり動作を見せていただいた際に、A様が廊下の手すりを使って自力で立ち上がることができた。そのとき私は、共に喜び、A様の意欲をさらに引き出せるような言葉かけが必要だと考えたが、生田(2008)「練習が過多であると動作の中にノイズが増え、よい動作の記憶を傷つけると考える。[2)]」とあり、利用者のちょっとした疲労の変化を動作の中や、表情から見つけ、休憩をすることの必要性を学ぶことが出来た。

Ⅶ．おわりに

今回のケーススタディーでは、実習で計画・実施した内容に加え、文献等から調べることによって、違う観点からの支援内容を考えることができた。広い視野と、利用者主体の考え方をもった介護福祉士になりたいと思う。

参考・引用文献

1)生田宗博（2008年）「片麻痺　能力回復と自立達成の技術　現在の限界を超えて」　三輪書店 p.174

2)生田宗博（2008年）「片麻痺　能力回復と自立達成の技術　現在の限界を超えて」　三輪書店 p116